

「日本の光学研究」への思い

齋 木 敏 治
(慶應義塾大学)

日本の光学界の1年間をふりかえる「光学」特集号の様態替えから4年が経ちました。副編集委員長、委員長の立場でこの4回の編集に携わってきた者として、対象研究の選定にご協力いただいた皆様、ならびに紹介記事を快くご執筆くださいました研究者の方々に厚くお礼申し上げます。筆者の前任の早崎編集委員長の提案により始まったこの「〇〇年日本の光学研究」は、アメリカ光学会（OSA）機関誌の先行例があったとはいえ、特集のコンセプト、選定の方針からフォーマットに至るまで、多くの議論や試行錯誤を必要とし、ようやくある程度落ち着いた形になってまいりました。その間、特集担当の編集委員の皆さん、編集局の方々には大変なご苦勞をおかけしました。

ご推薦いただいた研究はいずれもまさしく1年を代表するものばかりでありましたが、さらにそこから選び抜かれたそうそうたるラインナップを眺めるに、研究内容もさることながら、そのアピール力が印象的でした。力強い題目や見栄えのする図で魅了し、「読んでほしいと自分を呼んでいる」かのように誘いかけます。

もっとも、この企画には、高インパクトファクター誌の箔がついたビジビリティの高い研究ばかりを集めないようにしたい、という思いも少なからずあります。よい研究は咲く場所を選ばないはずであり、それを見つけ、少々目につきやすい場所にそっと移すというものがこの特集号の役割であろうという気持ちです。しかしこれには相応の目利きと出会いが必要であります。学会の場で生の声を聞き、その研究の価値を理解し、情熱を汲み取り、それを応援する、そのような営みも、研究そのものと同じくらい研究者にとって重要な活動であるはずで、本当にすぐれた研究の芽を隠れた場所から拾い上げることができれば、それは自身が高インパクトファクターの研究成果を上げる以上に価値があることかもしれません。

コロナ禍でさまざまな活動が制限されるなか、学内・社内の多くの会議はオンラインでも十分成立することが認識されつつあります。これからは時間の使い方も大いに見直されてくることでしょう。研究者同士の出会いと議論のための時間ももっと増え、思いや価値観を共有し、それが互いにとってよいフィードバックとなることを願っております。